

58 学習英文法へ繋げるための認知言語学基礎 ——図と地、トラジエクターとランドマークの関係性

我々は身の回りのものを知覚する際、特定の部分に焦点を当てながら認知していくが、その際には、焦点が当たる部分と当たらない部分が存在する。知覚心理学の分野では、焦点化されている部分を「図」(figure) もしくはプロファイル(profile) と言い、その背景になっている部分は「地」(ground) もしくはベース(base) と言う。図は前景化されているもの、地は背景化されているものを指す。認知的観点から図と地の存在を確認できる例としては下に示す「ルビンの盃」がよく知られている。

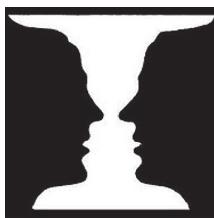


図1 ルビンの盃

デンマークの心理学者、E・ルビン (Edgar John Rubin, 1886-1951) が考案したこの図形は、物理的には一つの図形でありながらも、焦点の置き方次第で2つの存在物を同時に表すことから、多義図形とも呼ばれる。例えば、白い部分に焦点を当てて解釈した場合、「盃」として知覚されるが、黒い部分に焦点を当てた場合、「2人の人間の横顔」として知覚される。このように一つの図形であっても、どこを前景化し、どこを背景化するかで複数の解釈が成り立つ。そして、この図形から「図」と「地」の認識が表裏一体の関係にあることが確認できる。つまり図中の白い部分は、それ以外の黒い部分、すなわち「地」の部分との関係性において、初めて「盃」としての「図」の意味を持つことになる。同様に黒い部分は、それ以外の白い「地」の部分との関係性において、初めて「2人の人間の横顔」としての「図」の意味を持つことになる。

一般に、我々はあるものごとを認識する際、背後、周囲に隣接する存在との関係から、そのものごとの意味を認識していると考えられる。この場合、意識、関心が注がれている該当の認識対象を「図」と捉えると、その周囲、背後から「図」の意味を支えているのは「地」の存在ということになる。「図」は「地」との関係性において「図」としての意味を持つ。当然、「図」の解釈には、その背後、周囲に見いだされる「地」の存在を捉えることが必要になる。とりわけ、認知文法で

は、意味とは物理的世界の概念にあるのではなく、心の中で何かを思い描くという認知プロセス、つまり概念化 (conceptualization) そのものの中にあると考えられている。Langacker (2008) によると、我々人間は、人間に固有の認知能力 (cognitive abilities) に基づき、同一の状況を概念化する際にも、どこに焦点を置くべきなのか (際立ち (prominence)) や、どの程度詳しく述べるのか (詳述性 (specificity)) や、どのような位置から述べるのか (観点 (perspective)) というようなものの捉え方 (construal) に依存して意味づけを行っている。

次に、認知の相違を明確化するための概念として **トラジェクター (Trajector)** と **ランドマーク (Landmark)** について述べる。一般的に前者は「軌道体」、後者は「基準点」と呼ばれることがある (李 2010: 39-42)。これらの研究対象としてはしばしば移動表現が取り上げられることが多く、その根源的特徴については多くの先行研究が見られる。次の例文を見てみよう。

(1) 花子が学校に行く。

この文においても移動表現が用いられており、動作主の「花子」のように際立って認知される対象がトラジェクター、つまり軌道体になる。そして、移動先の「学校」のように、トラジェクターに比べ相対的に際立ちの低い対象がランドマーク、すなわち基準点になる (李 2010)。「入る」、「出る」、「走る」、「消える」などの移動表現に関しては、名詞の場所性の問題が深く関わってくるが、どのような名詞が認知プロセスにいかに関与しているのかについては稿を改めるべき問題であり、ここでは一般論への言及に留める。

動詞と名詞の関係一つを取っても限りなく組合せが存在し、また、当然のことながら、個別の話者における母語能力と外国語能力が認知プロセスに深く関わっているので、諸言語特有の言語的特徴と個別話者の母語能力、外国語能力を複眼的に考察した研究を進めることも、これからの中英語教育にとって有益なものになる。

(松尾 真太郎)